

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

2. 令和5年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.1 人間学部

はじめに

本報告書は、令和5年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された91科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する17項目（評価基準は1～5点）の計19項目で構成されている。そのうち、授業及び学修に関する計17項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 設問群①：「授業内容」 | 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点 |
| 設問群②：「授業方法」 | 3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点 |
| 設問群③：「総合評価」 | 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点 |
| 設問④：「学修時間」 | 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、4h以上）の比 |
| 設問群⑤：「学修行動」 | 5項目それぞれの平均点 |

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。また、設問①～③を「全体」として11項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点も算出している。なお、担当者独自在個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わない。

（1）共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図1（心理学科9科目）、および図2（コミュニケーション学科11科目）である。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は272名で、各学年それぞれ1年生=73名、2年=194名、3年=3名、4年=2名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は256名で、各学年それぞれ1年=95名、2年=145名、3年=10名、4年=6名であった。

昨年度と比較すると、心理学科では、1年生についてはいずれの項目とも昨年度を下回ったが、2年生についてはほとんどの項目で昨年度を上回った。3年生と4年生については、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから人数が少なく、昨年度との比較は行っていない。コミュニケーション学科では、1年生と3年生についてはいずれの項目においても昨年度を上回ったが、2年生についてはすべての項目で昨年度を下回った。

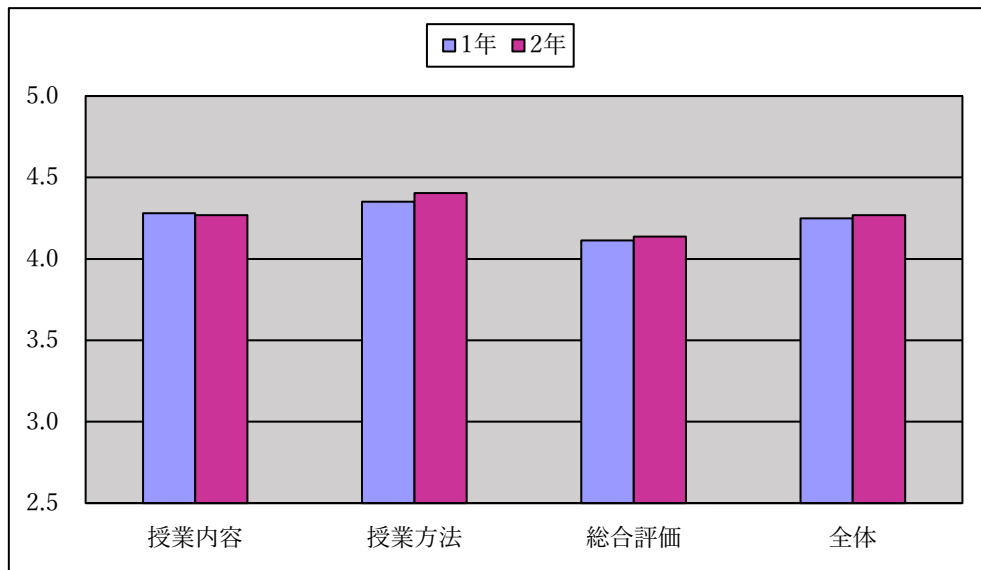


図1 心理学科：共通教養科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=73名、2年=194名

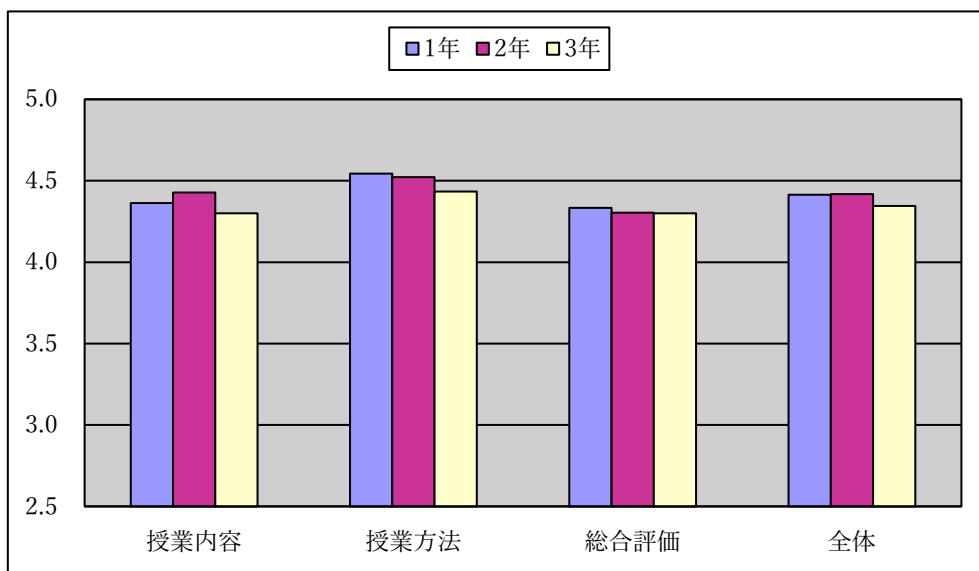


図2 コミュニケーション学科：共通教養科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=95名、2年=145名、3年=10名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図3（心理学科8科目）、および図4（コミュニケーション学科9科目）である。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は96名で、各学年それぞれ1年=85名、2年=8名、3年=3名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は89名で、各学年それぞれ1年=72名、2年=8名、3年=7名、4年=2名であった。

昨年度と比較すると、心理学科では、1年生については、いずれの項目においても昨年度を下回った。コミュニケーション学科では、1年生については、いずれの項目においても昨年度を若

干下回った。心理学科およびコミュニケーション学科の2年生と3年生については、人数が少ないため昨年度との比較は行っていない。

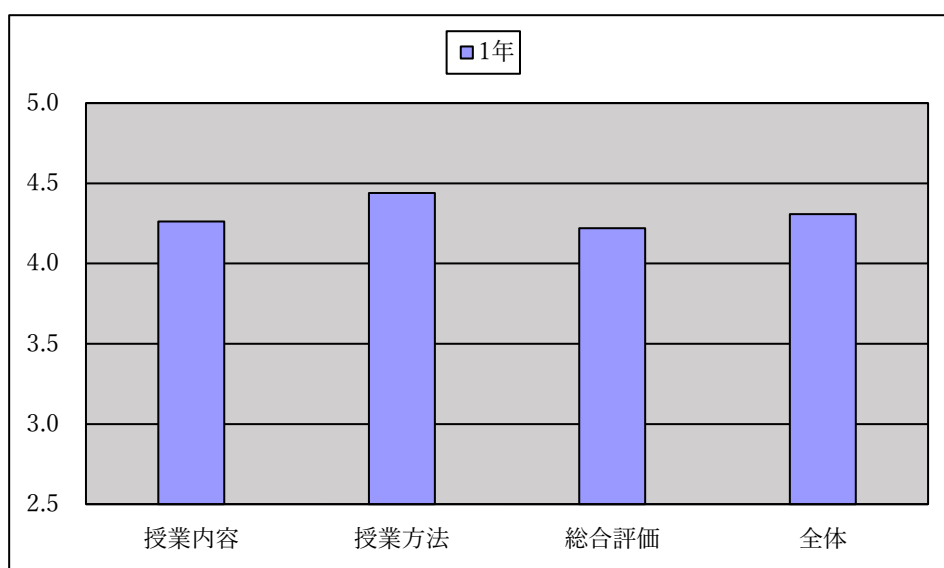


図3 心理学科：共通語学科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=85名

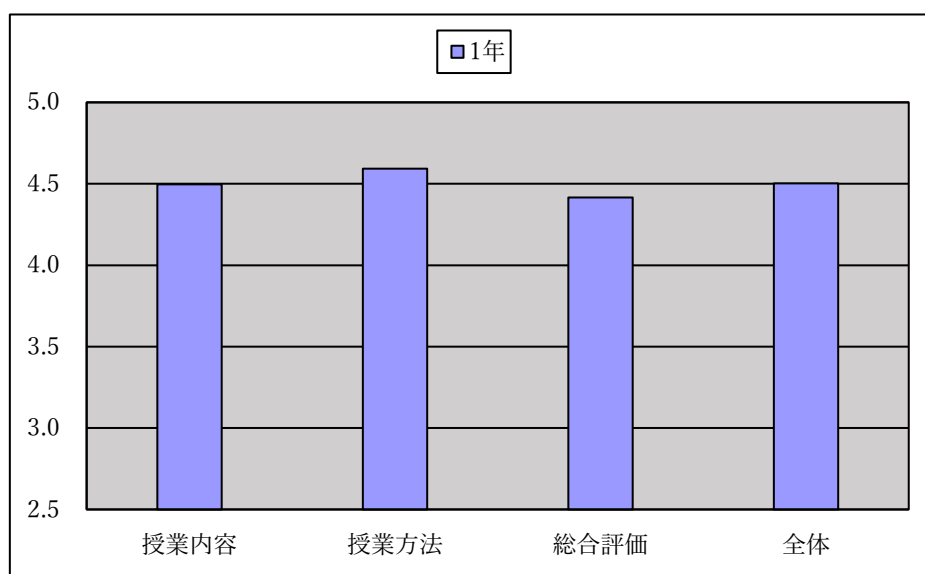


図4 コミュニケーション学科：共通語学科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=72名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 21 科目、コミュニケーション学科 44 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図5（心理学科）、および図6（コミュニケーション学科）である。図5に示された心理学科の学生の延べ人数は1,148名で、各学年それぞれ1年=388名、2年=415名、3年=342名、4年=3名であった。また、図6に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は922名で、各学年それぞれ1年=468名、2年=300名、3年=142名、4年=12名であ

った。

昨年度と比較すると、心理学科では、1年生と2年生について、いずれの項目においても昨年度を上回ったが、3年生については、いずれの項目においても昨年度を下回った。4年生については、人数が少なく、昨年度との比較をしていない。コミュニケーション学科では、1年生と3年生、4年生について、すべての項目において昨年度を上回ったが、2年生については、いずれの項目においても昨年度を下回った。

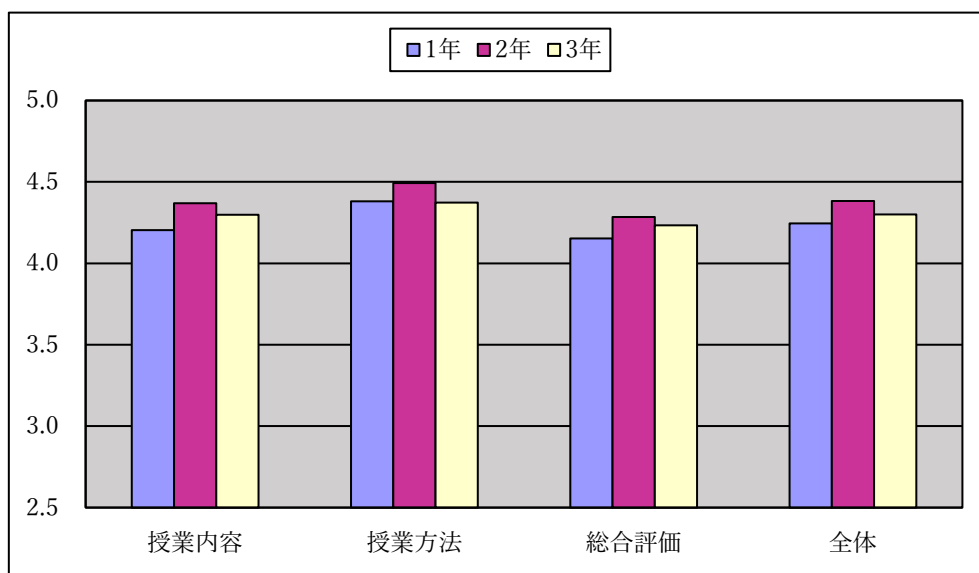


図5 心理学科：専門科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=388名、2年=415名、3年=342名

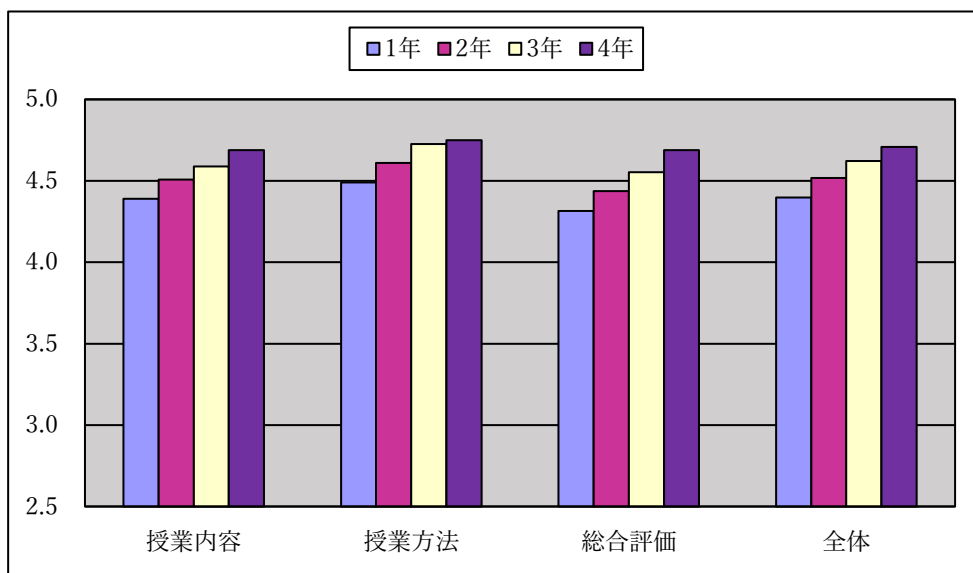


図6 コミュニケーション学科：専門科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数 1年=468名、2年=300名、3年=142名、4年=12名

(4) 科目の種類による比較

ここから、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者数であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は77科目であったが、学部共通科目13科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

[共通科目と専門科目の比較]

図7は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の平均評価点を学科別に示したものである。

心理学科では、分類した共通科目の各設問の平均評価点は4.36～4.40の範囲となり、専門科目の各設問の平均評価点は4.19～4.39の範囲であり、すべての設問において共通科目の方が専門科目より評価が高かった。

コミュニケーション学科では、分類した共通科目の各設問の平均評価点は4.49～4.65の範囲となり、専門科目の各設問の平均評価点は4.53～4.64の範囲となり、すべての設問において専門科目の方が共通科目より評価が高かった。

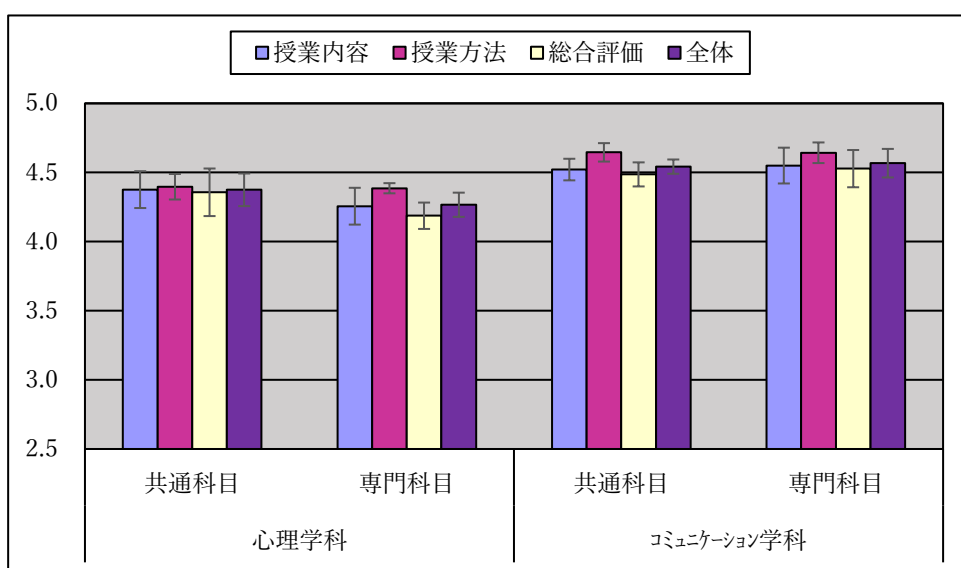


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）

共通科目と専門科目数は、心理学科で5、21科目、
コミュニケーション学科で7、44科目

[必修科目と選択科目の比較]

履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものが図8である。

心理学科では、分類した必修科目の各設問の平均評価点は4.21～4.41の範囲となり、選択科目の各設問の平均評価点は4.22～4.38の範囲であった。必修科目と選択科目の比較をすると、授業方法を除いたすべての設問において、必修科目と選択科目の平均評価点はほぼ同じであった。授業方法については、必修科目（4.41）の方が選択科目（4.38）より評価が高かった。

コミュニケーション学科では、分類した必修科目の各設問の平均評価点は4.32～4.55の範囲となり、選択科目の各設問の平均評価点は4.55～4.66の範囲となり、すべての設問において選択科目の方が必修科目より評価が高かった。

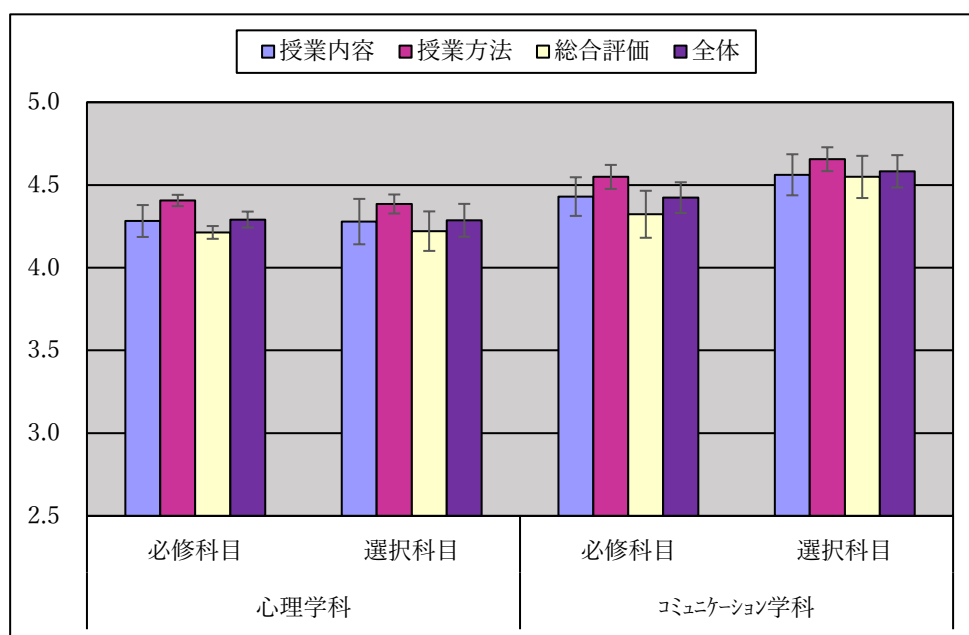


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）

必修科目と選択科目数は、心理学科で4、22科目、
コミュニケーション学科で6、45科目

[科目の履修者数による比較]

履修者数（履修者が 40 名未満の科目と 40 名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものが図 9 である。なお、40 名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

心理学科では、分類した 40 名未満の科目において各設問の平均評価点は 4.36～4.40 の範囲となり、40 名以上の科目において各設問の平均評価点は 4.19～4.39 の範囲となり、すべての設問において 40 名未満の科目の方が 40 名以上の科目より評価が高かった。

コミュニケーション学科では、分類した 40 名未満の科目において各設問の平均評価点は 4.60～4.68 の範囲となり、40 名以上の科目において各設問の平均評価点は 4.33～4.55 の範囲となり、すべての設問において 40 名未満の科目の方が 40 名以上の科目より評価が高かった。

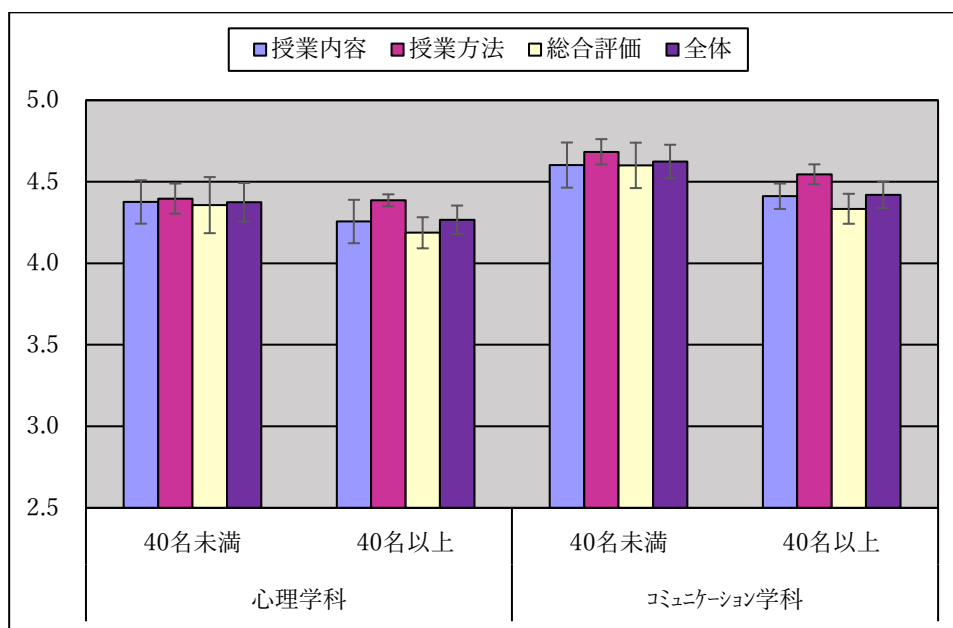


図 9 受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）

40 名未満、40 名以上の科目数は、心理学科で 5、21 科目、
コミュニケーション学科で 36、15 科目

各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したものが、図 10（心理学科）と図 11（コミュニケーション学科）である。

心理学科では、相関係数は $r=0.44$ であり、履修者数が多いほど評価得点が高いことを示した。履修者数の違いで評価を比較した結果では、40 名未満の科目の方が 40 名以上の科目より平均評価点が高いという結果が得られており、相関係数の結果とは異なるものであった。この違いに関して、相関係数の算出は回収率 60%以上の科目を分析対象（計 17 科目）としているのに対して、履修者数の違いを比較した科目では回収率に関わらず分析対象（計 26 科目）としたことが、結果の違いに反映したと考えられる。

コミュニケーション学科では、相関係数は $r=-0.59$ であり、履修者数が多いほど評価が低いことを表している。

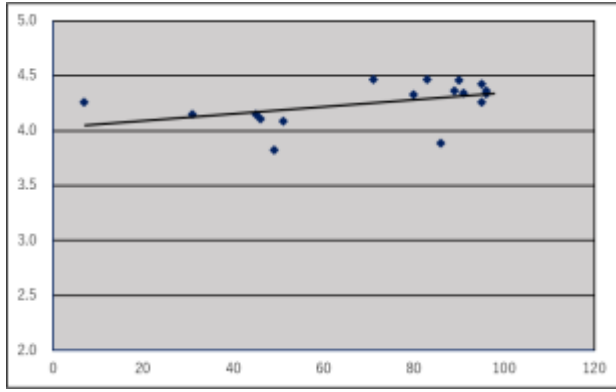


図 10 心理学科 履修者数（横軸）と授業
評価点（縦軸）との相関
 $r = 0.44$ (n=17)

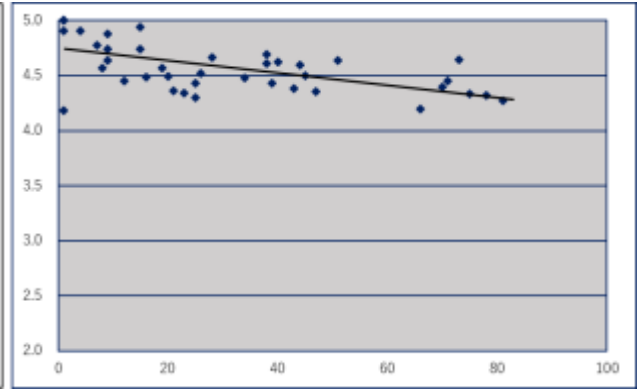


図 11 コミュニケーション学科 履修者数
（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.59$ (n=41)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものが図 12 である。それぞれの科目数は心理学科が 1、4、21 科目、コミュニケーション学科が 3、4、44 科目であった。それぞれ分類された科目別における回収率の平均は、心理学科では共通教養の回収率が 77.42%と最も高く、専門科目が 68.37%、共通語学が 47.55%であった。コミュニケーション学科では共通教養の回収率が 80.25%と最も高く、専門科目が 73.17%、共通語学が 73.24%であった。

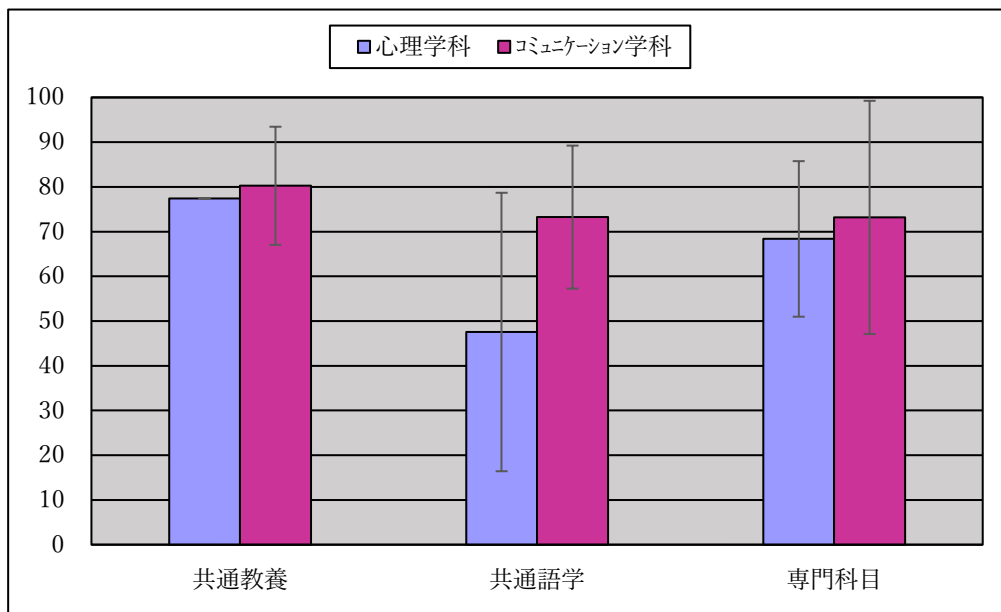


図 12 各科目の平均回収率（±SD）（%）
それぞれの科目数は、心理学科で 1、4、21 科目
コミュニケーション学科 3、4、44 科目

(5) 学修時間と学修行動

[学修時間]

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものが図 13 および図 14 である。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する時間である。

心理学科の延べ回答数は、1 年生が 547 件、2 年生が 618 件、3 年生が 351 件、4 年生が 6 件であった。授業外学修時間 1 時間未満の者は 1 年生で 53%程度、2 年生で 46%程度、3 年生で 57%程度であり、昨年度と比較して 1 年生と 2 年生では減少したが、3 年生では増加している。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、1 年生で 13%程度、2 年生で 21%程度、3 年生で 16%程度であり、概ね昨年度より増加している。4 年生については人数が少ないことから分析していない。

コミュニケーション学科の延べ回答数は、1 年生が 636 件、2 年生が 458 件、3 年生が 160 件、4 年生 20 件であった。授業外学修時間 1 時間未満の者は 1 年生で 45%程度、2 年生で 47%程度、3 年生で 42%程度であり、昨年度と比較して 1 年生と 3 年生では減少したが、2 年生では増加している。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、1 年生で 20%程度、2 年生で 23%程度、3 年生で 21%程度であり、1 年生と 3 年生で増加したが、2 年生では減少している。

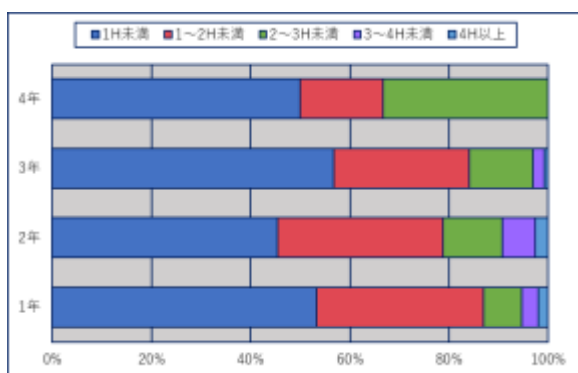


図 13 心理学科の授業外での学修時間

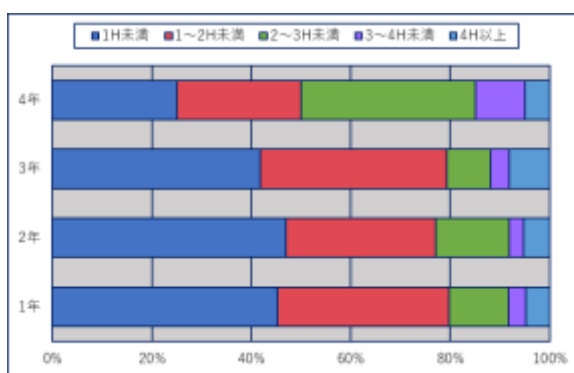


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

[学修行動]

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものが図 15 および図 16 である。

心理学科では、全学年において「授業に集中してのぞめた」および「授業を欠席しなかった」という設問において全学年 4.1 以上と高い点数であり、昨年度より上昇傾向であった。一方、「授業に関して積極的に質問等を行った」および「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」という設問は概ね 2.2~2.8 の範囲であり、昨年度とほぼ同じ傾向を示した。

コミュニケーション学科では、全学年において「授業に集中してのぞめた」および「授業を欠席しなかった」という設問について 3.9 以上と高い点数であり、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」という設問も 3.1 以上であった。また、「授業に関して積極的に質問等を行った」という設問では、2.5~3.3 の範囲であったが全学年ともに昨年度より上昇する傾向を示した。一方、「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」という設問では、1 年生~3 年生は 3.2~

3.5 の高い点数を示したが、4 年生は 2.2 と点数が低くまた昨年度の点数と比較しても低い点数であった。

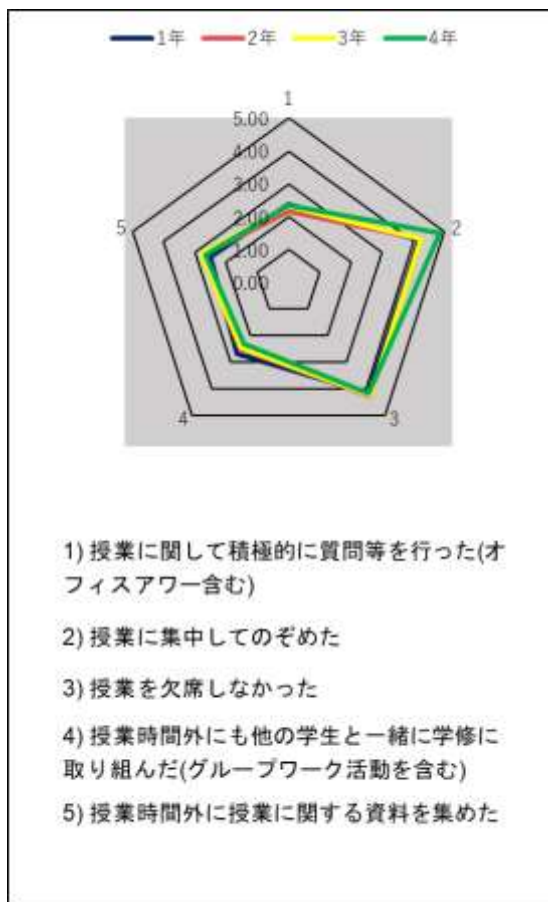


図 15 心理学科の学修行動

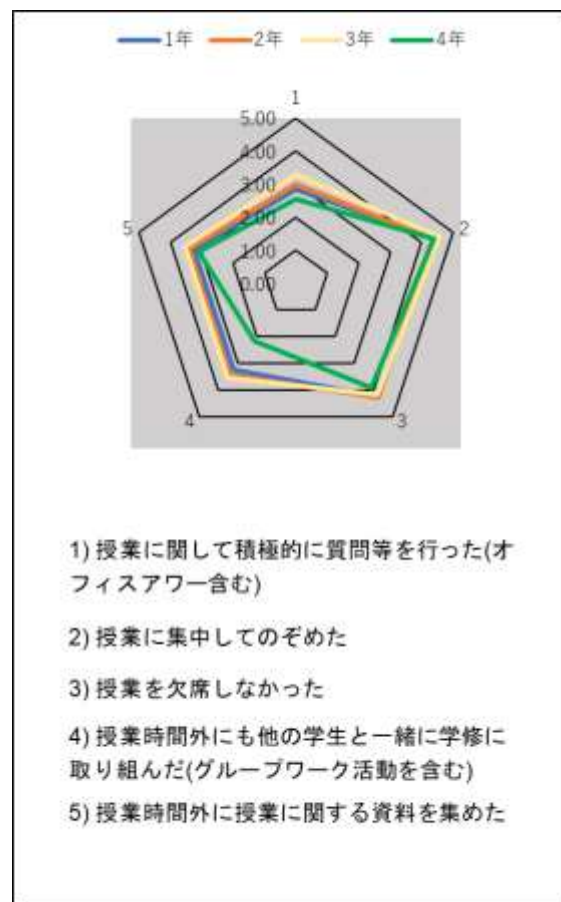


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

(報告：竹村 明子)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

2. 令和5年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.2 人間生活学部

はじめに

本報告は、令和5年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された117科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する17項目（評価基準は1～5点）の計19項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計17項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、4h以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 5項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。また、設問群①～③を「全体」として11項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点も算出している。なお、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。経時的な理解のために昨年と比較する場合は、「令和4年度仁愛大学FD推進活動報告書」を御覧ください。

（5）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において10科目から回答を得た（図1参照）。延べ回答人数は、1年生が136名、2年生が58名、3年生1名、4年生5名であった。3年生と4年生は回答者が10名以下であったため、規定に従いグラフから除外した。1年生、2年生ともに、「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」および「全体」の4項目すべてで4.0以上であった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において9科目から回答を得た（図2参照）。延べ回答人数は、1年生が132名、2年生が27名、3年生2名、4年生3名であった。回答者が10名以下だった3年生と4年生は、規定に従いグラフから除外した。1年生、2年生ともに、「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」および「全体」の4項目すべてで4.0以上であった。

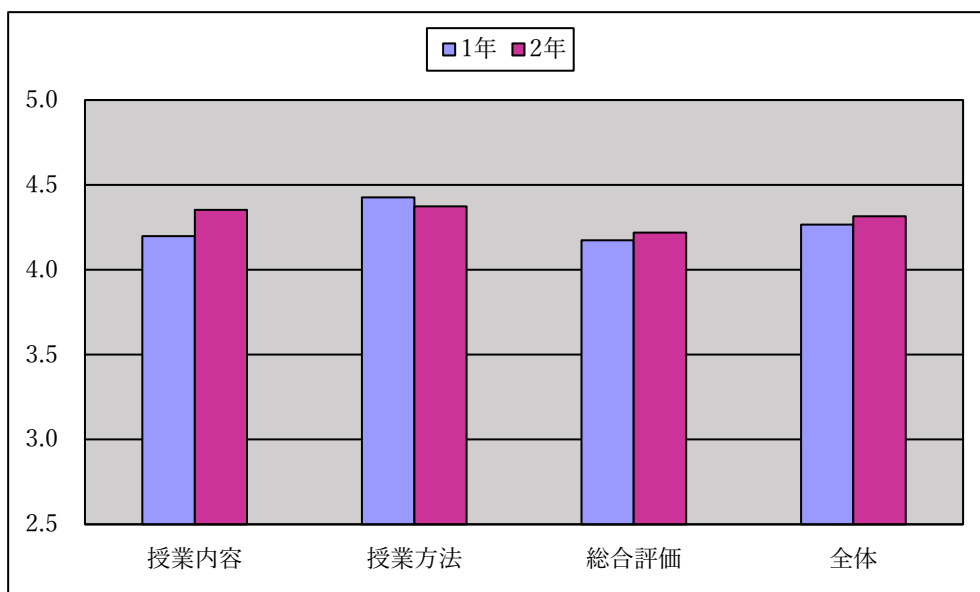


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=136名、2年=58名

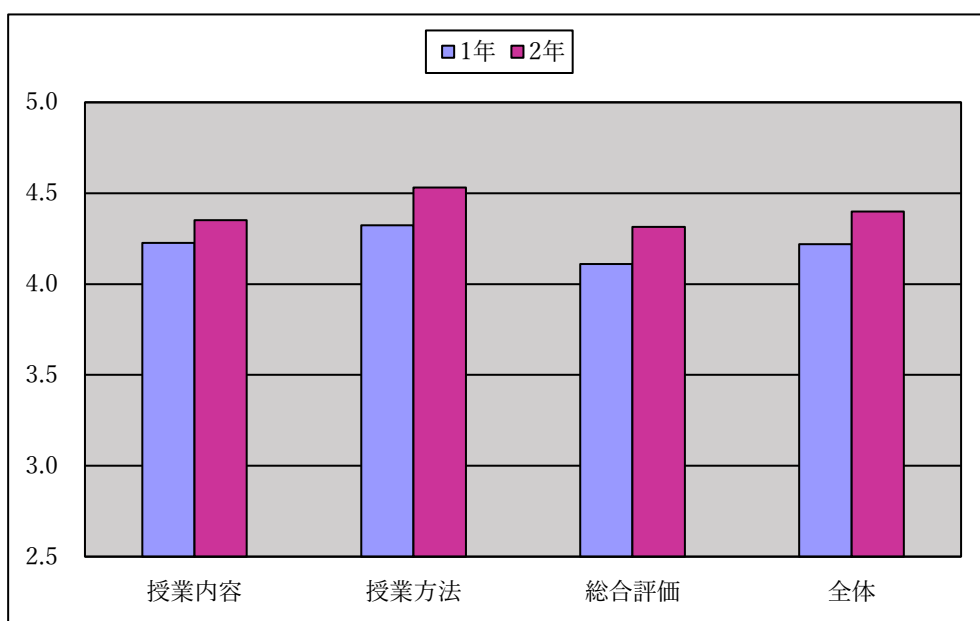


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=132名、2年=27名

(6) 共通語学科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図3参照）。延べ回答人数は、1年生が53名、2年生が8名、3年生が1名、4年生が4名であった。回答者が10名以下の2～4年生はグラフから除外した。1年生における「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目で4.3以上であった。

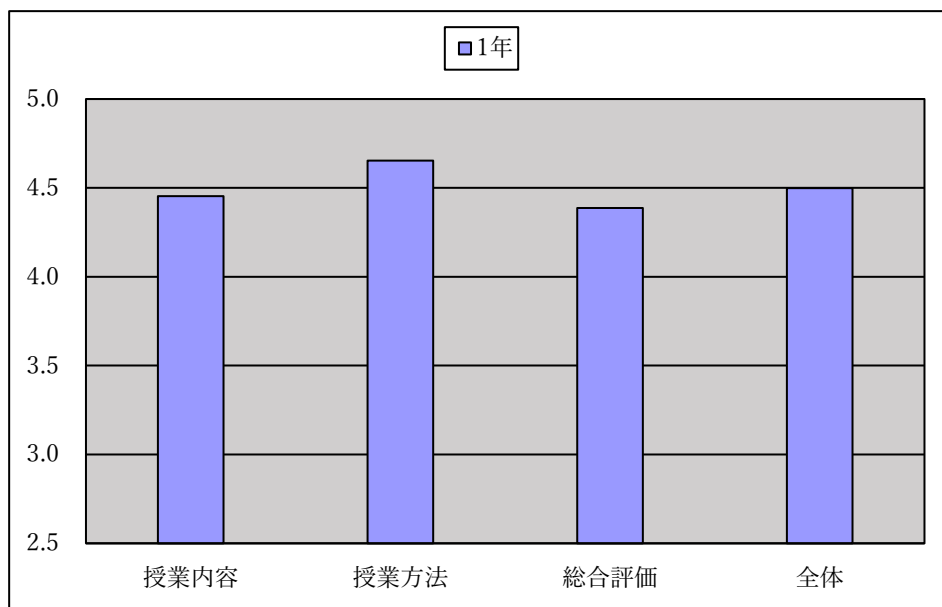


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=53名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図4参照）。延べ回答人数は、1年生が69名、2年生が7名、3年生と4年生が0名であった。回答者が10名以下の2～4年生はグラフから除外した。1年生における「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目で4.3以上であった。

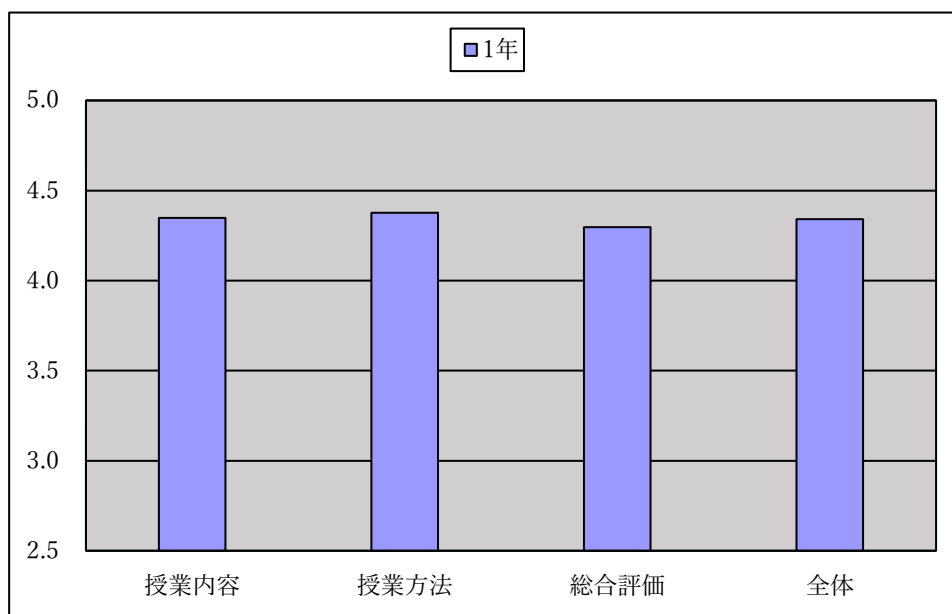


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=69名

(7) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 43 科目から回答を得た (図 5 参照)。延べ回答人数は、1 年生が 238 名、2 年生が 520 名、3 年生が 284 名、4 年生が 23 名であった。1~4 年生の全学年において、全ての項目で 4.0 以上となり、とくに 4 年生における評価は令和 4 年度を顕著に上回っていた。

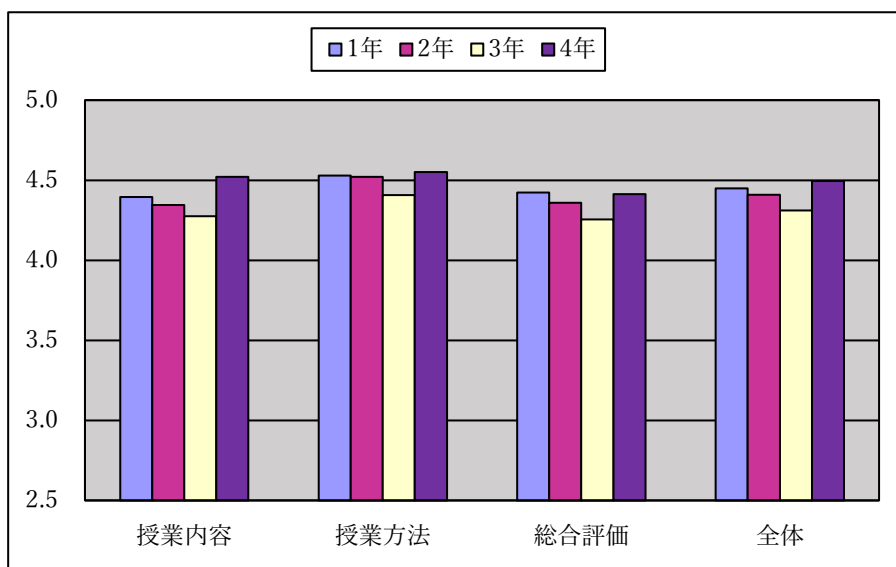


図 5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=238 名、2 年=520 名、3 年=284 名、4 年=23 名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、50 科目から回答を得た (図 6)。述べ回答人数は、1 年生が 314 名、2 年生が 330 名、3 年生が 330 名、4 年生が 32 名であった。すべての学年において全項目が 4.0 を超えており、とくに 2 年生及び 3 年生の評価が令和 4 年度よりも高くなっていた。

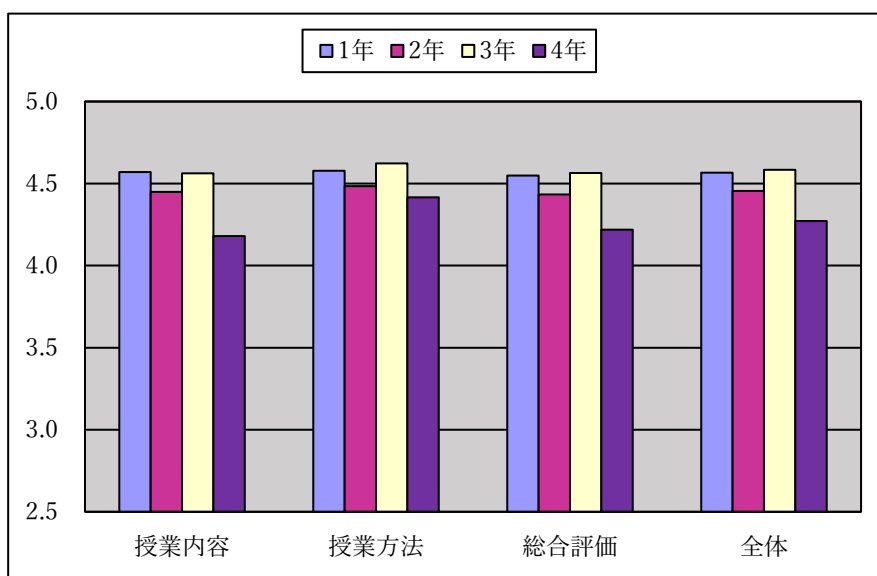


図 6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=314 名、2 年=330 名、3 年=330 名、4 年=32 名

(8) 科目の種類ごとによる比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は103科目である。なお、学部共通科目6科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目ともに「授業内容」「授業方法」「総合評価」および「全体」の全項目で4.4以上であった。令和4年度と比較すると、共通科目と専門科目ともに評価が高くなっている傾向であり、とくに共通科目のすべての項目が顕著に高くなっていた。

子ども教育学科でも、共通科目と専門科目共に「授業内容」「授業方法」「総合評価」および「全体」の全項目で4.4以上であった。令和4年度と比較すると、共通科目と専門科目ともに評価が高くなっている傾向であり、とくに共通科目の「授業方法」が顕著に高くなっていた。

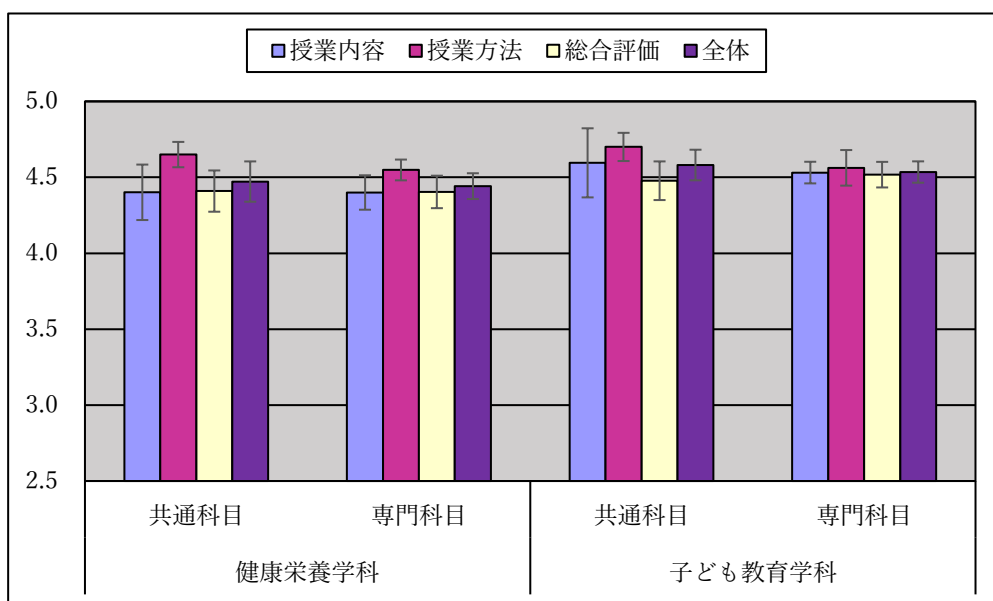


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)
共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で5、43科目、
子ども教育学科で5、50科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は103科目である。

健康栄養学科では、必修科目の各設問の平均評価点は概ね4.3~4.5、選択科目の各設問の平均

評価点は概ね 4.4～4.6 の範囲内であった。全体の傾向として必修科目より選択科目の評価がやや高く、令和 4 年度とは逆の傾向になった。

子ども教育学科では、必修科目の各設問の平均評価点は概ね 4.4～4.5、選択科目の各設問の平均評価点は概ね 4.5 台の範囲であった。若干ではあるが必修科目より選択科目の評価が高く、必修科目の評価がやや高かった令和 4 年度とは逆の傾向になった。

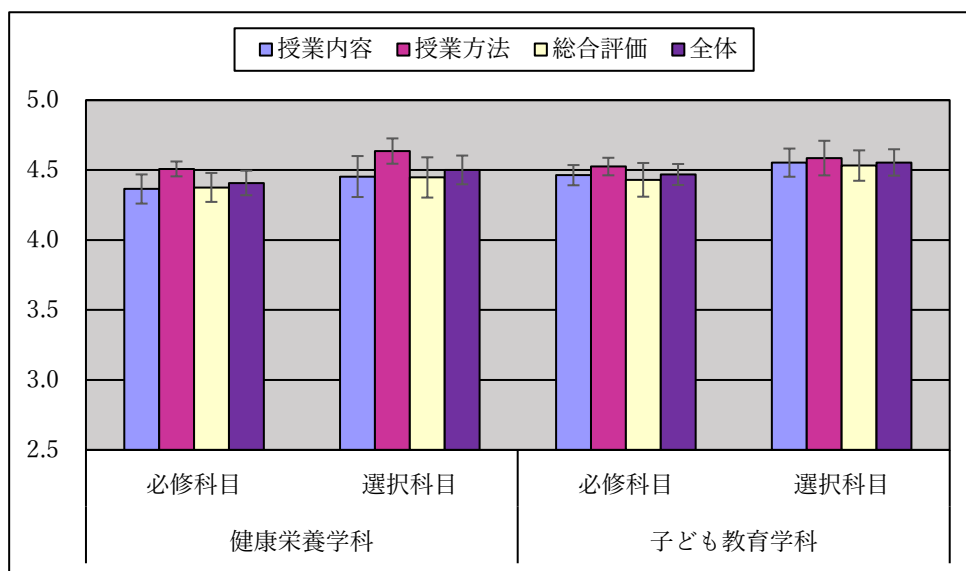


図 8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)
 必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 29、19 科目、
 子ども教育学科で 10、45 科目

[受講生数による比較]

図 9 は、受講生が 40 名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は 103 科目である。

健康栄養学科の各設問の平均評価点は、40 名未満の科目においてすべての項目で概ね 4.4～4.5、40 名以上の科目においては概ね 4.2～4.4 の範囲で、40 名未満の科目の方がやや高かった。

子ども教育学科の各設問の平均評価点は、40 名未満の科目においてすべての項目で概ね 4.5～4.6 の範囲、40 名以上の科目においては概ね 4.3 台であり、健康栄養学科と同様 40 名未満の科目の方が高い傾向になった。

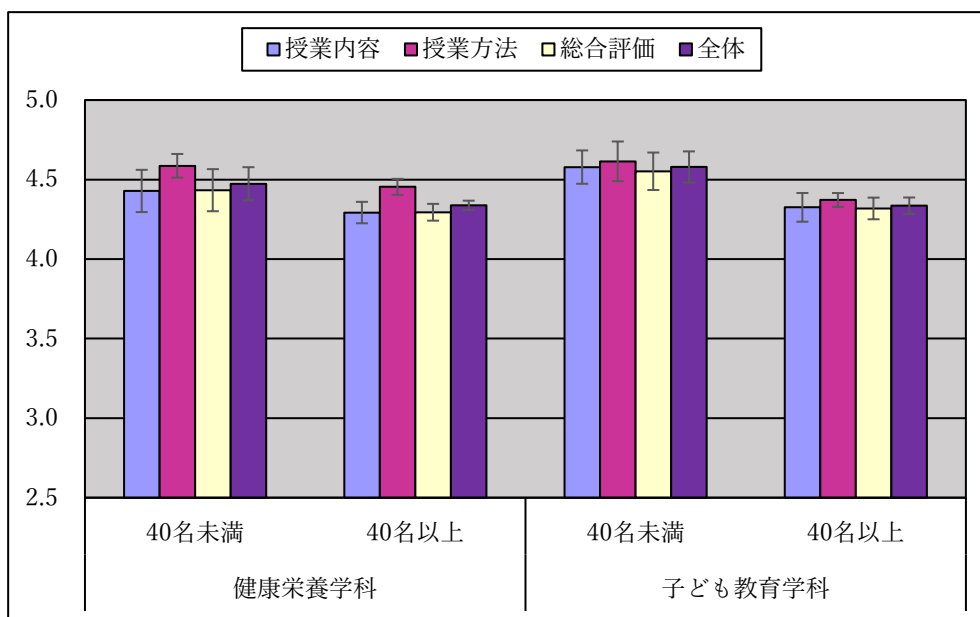


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)
 40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で38、10科目、
 子ども教育学科で46、9科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図10~11は、各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。相関係数は、健康栄養学科では $r = -0.38$ 、子ども教育学科では $r = -0.48$ であった。両学科において、受講者数が多くなると授業評価点がやや下がる傾向が認められた。

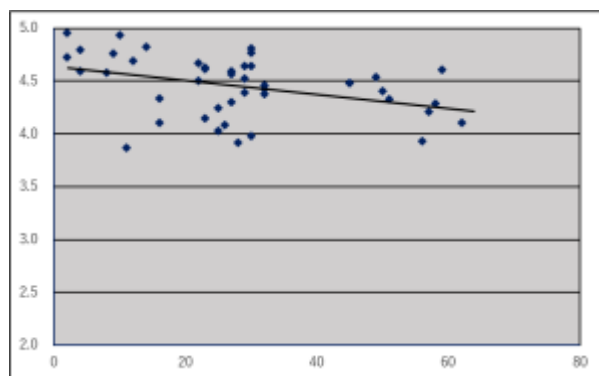


図10 健康栄養学科 履修者数(横軸)と授業評価点(縦軸)との相関
 $r = -0.38$ (n=44)

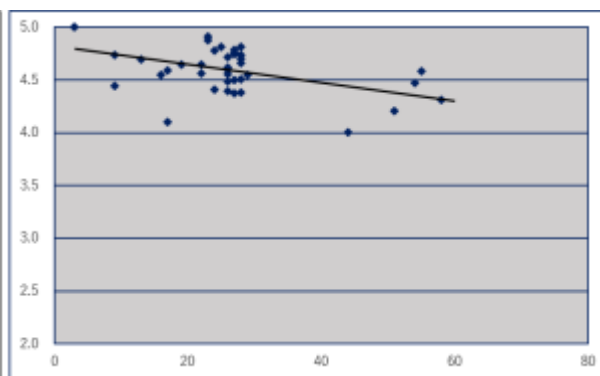


図11 子ども教育学科 履修者数(横軸)と授業評価点(縦軸)との相関
 $r = -0.48$ (n=40)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図12に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が2、3および43科目、子ども教育学科が2、3および50科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は、健康栄養学科では、共通教養科目が100%、共通語学科目が約67%、専門科目が約

86%であった。子ども教育学科では、共通教養科目が約 46%、共通語学科目が約 55%、専門科目で約 74%程度であった。

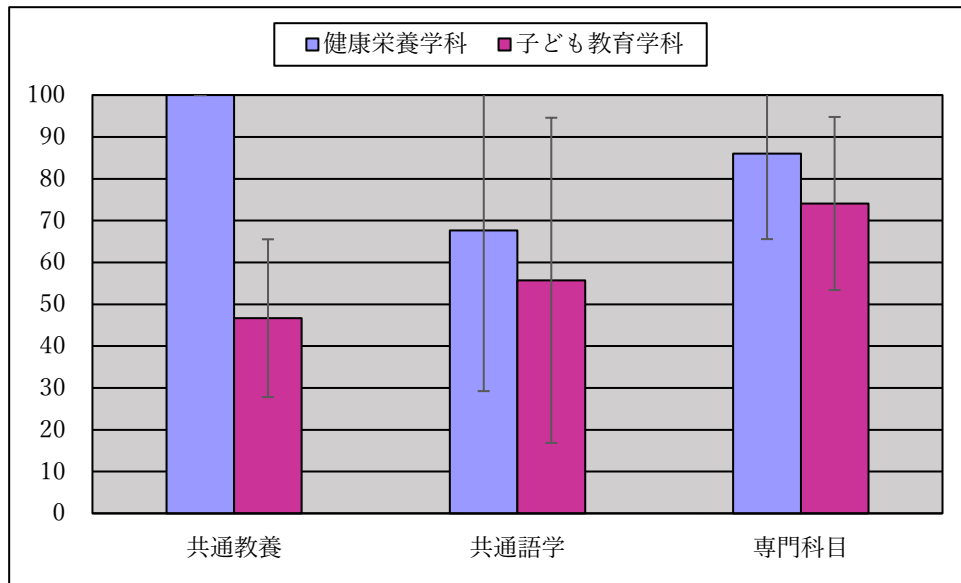


図 12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、3 および 43 科目、
子ども教育学科で 2、3 および 50 科目

(9) 学外での学修時間

[健康栄養学科]

図 13 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は 1 年生が 427 件、2 年生が 586 件、3 年生が 286 件、4 年生が 32 件であった。授業外学修時間 1 時間未満の者は 1 年生で 50%程度、2 年生では 35%程度であり、令和 4 年度とほぼ変わらない結果となった。3・4 年生は 30%程度となり、令和 4 年度よりも若干増加していた。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、学年が上がるにつれて増加し、3 年生では 7 割近くになっていた。

[子ども教育学科]

図 14 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1 年生が 516 件、2 年生が 365 件、3 年生が 332 件、4 年生が 35 件であった。1 時間未満の比率が 1 年生で約 40%、2 年生で約 50%、3 年生で 40%程度、4 年生で約 70%程度と、令和 4 年度と比較すると、3 年生の減少と 2 年生の増加が顕著であった。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、1 年生と 3 年生で 40%以上に達していたが、4 年生では 3 割程度であった。

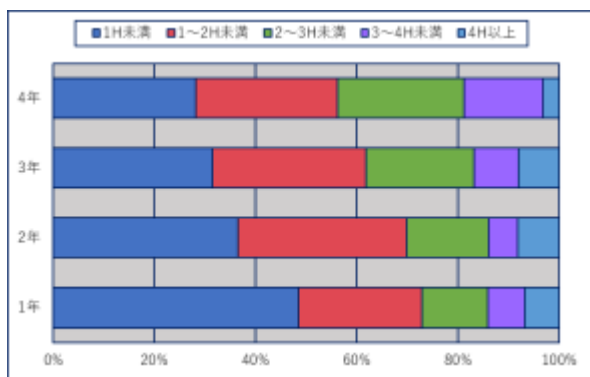


図 13 健康栄養学科の授業外での学修時間

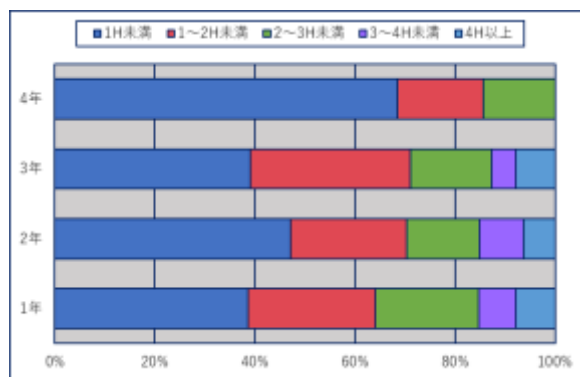


図 14 子ども教育学科の授業外での学修時間

(10) 学修行動について

[健康栄養学科]

図 15 は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に集中してのぞめた」「授業を欠席しなかった」の設問は全学年 4.2 以上と高い評価だったが、「授業に関して積極的に質問等を行った」「授業時間以外にも他の学生と一緒に学習に取り組んだ(グループワーク活動含む)」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の設問は概ね 2.5~4.0 の範囲内であった。

[子ども教育学科]

図 16 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。「授業を欠席しなかった」の設問は全学年 4.1 以上と高い評価だったが、「授業に関して積極的に質問等を行った」「授業に集中してのぞめた」「授業時間以外にも他の学生と一緒に学習に取り組んだ(グループワーク活動含む)」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の設問は概ね 2.5~4.5 の範囲とばらつきがみられた。すべての項目で 3 年生の平均評価点が高く、4 年生では逆にすべての項目の平均評価得点が低かった。

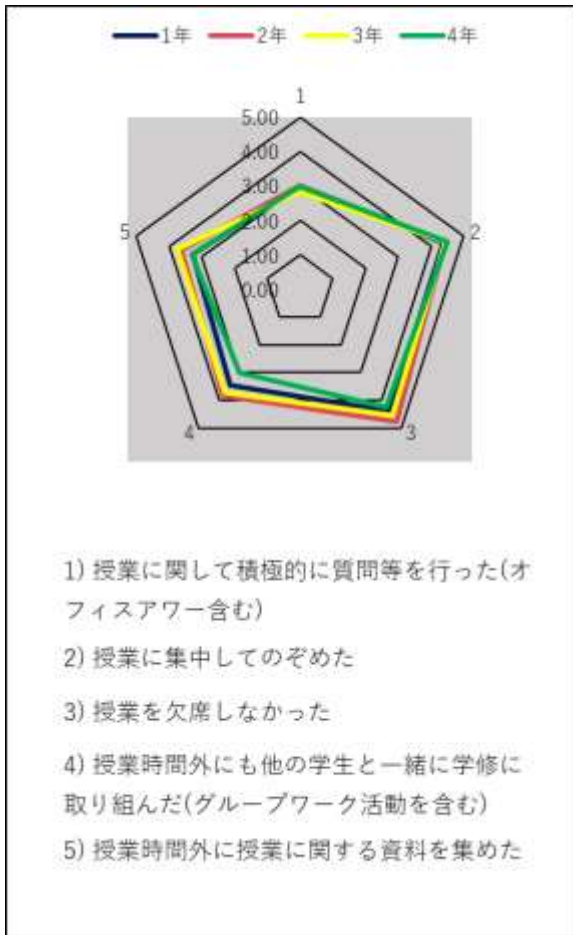


図 15 健康栄養学科の学修行動

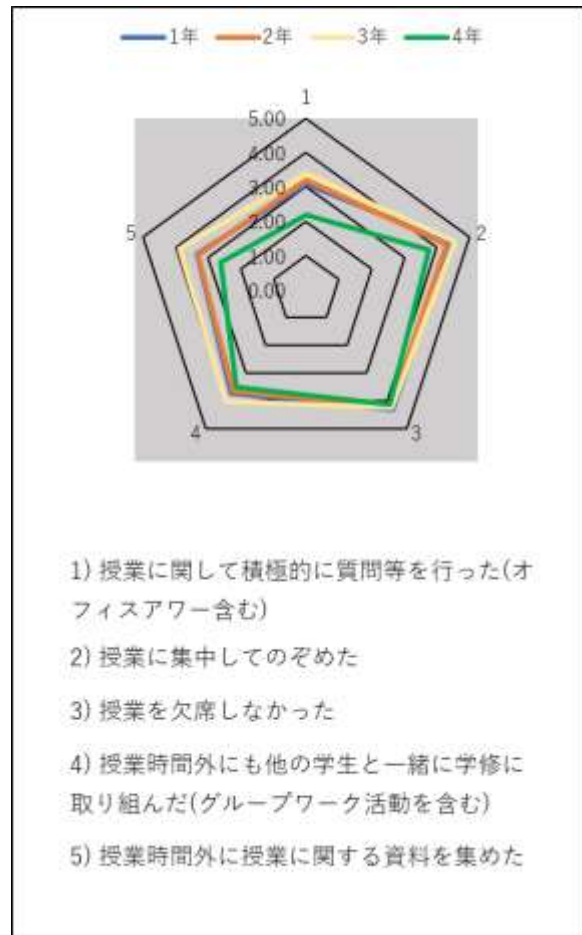


図 16 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

令和 5 年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し、概観した。今回に限ったことではないが、評価結果は科目の特性（各学年のカリキュラムなど）に影響を受ける一方で、前年度と比較して変動した科目もある結果を踏まえると、学生の特性による影響も大きいのではないだろうか。とくに学修行動に関しては、そもそも学修する習慣が身につけている学生や意欲が高い学生などが多い学年は、一貫して評価点が高くなるだろう。教員個人が集団の中で学生個人の特性を把握しながら授業に取り組むことは容易ではないため、授業評価の横断的な分析とともに縦断的な分析を行う等、授業評価の結果の活用方法を改めて考える必要があるかもしれない。

(報告：青井 夕貴)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3. 令和5年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.2 後期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

本報告書は、令和5年度後期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された5科目についてまとめたものである。今年度も学部と同じ5段階評価のWeb方式による記名式授業アンケートを実施した。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点に関して検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(11) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師の要ともいえる演習・実習科目は重要と考えられる。そのため授業形態ごとの比較は欠かせないが、後期授業の評価対象は、すべて講義科目であった。さらに、今年度がゼミ以外のすべての授業が選択科目とされた新カリキュラムの完成年度であることから、授業評価対象の全科目が選択科目となっている。

図1に、授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示した。分類した講義科目数は5科目、演習・実習科目はなかった。講義科目において、各項目の評価点はいずれも4.0強と高いが、昨年度後期よりもすべての項目において少し下がっている。今後、大学院教育の特性に合った教育方法について、各担当教員の工夫のみならず、研究科全体で議論する必要がある。

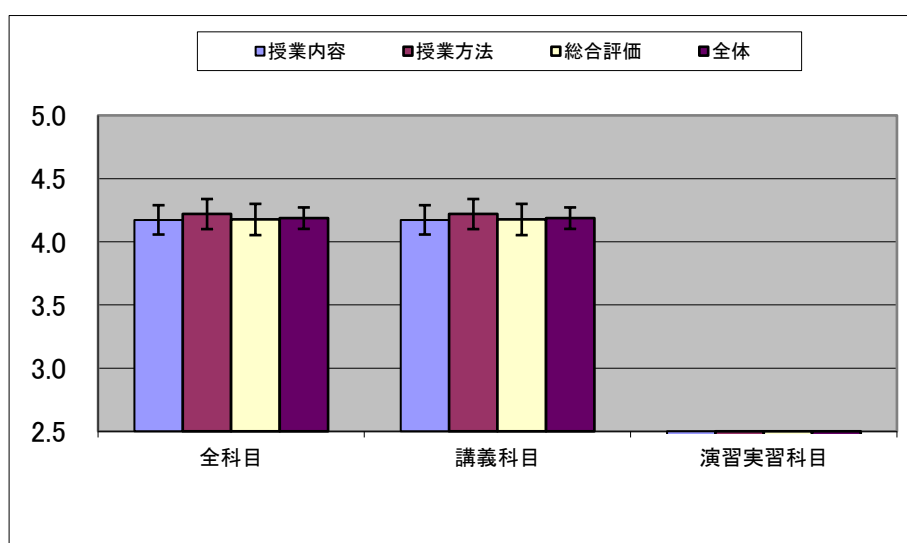


図1 講義科目と演習実習科目別の平均授業評価点（±SD）

講義科目と演習実習科目数は、5、0科目

（報告：大森慈子）